第6回　子どもと絵本　2
～絵本から広がる/絵本で広がるあそび～

講師　静岡福祉大学子ども学科 助教　山下　紗織

１　皆さんからの質問に対するお返事

（１）選書について

Ｑ１　年齢別（０～２歳児）のおすすめの絵本は？

大前提として、「この絵本がいい」というのは、目の前にいる子どもとの関わりの中で得られるものだと考えています。ですから、ここに紹介する絵本は、子どもと私がたのしんだ１冊であり、万人によい、ということにはならないかもしれません。子どもがぐっと絵本にひきつけられている、からだ全体でたのしんでいる、絵本の世界に入り込んでいる、という視点で、ご紹介したいと思います。

まず、子どもの身体性にはたらきかけるオノマトペやリズムが中心の絵本と、オノマトペとは違いますが、わらべうたの絵本などを紹介します。

『もこ　もこもこ』（文：谷川俊太郎　絵：元永定正）は、私が大学附属のナーサリーにいた時に０、１、２歳児みんなと一緒にたのしむことができた１冊です。この本には「もこ　もこもこ」「にょきにょき」「ぽろり」「ぱちん」などの音が登場します。これらの音に合わせて、お尻を持ち上げる、声をあげて笑う、手をたたく、ふわふわ歩くなど、それぞれの年齢の子どもがそれぞれのやり方で思わず動いてしまう、素敵な絵本です。『ころ　ころ　ころ』も音の響きが耳に残り、その音をまねして横になってころころするなど、思わず動きたくなる絵本です。また「が」「の」「と」の３種類ある『だるまさんが』シリーズも、子どもの身体性にはたらきかける絵本ですね。さらに『ととけっこう　よがあけた』は、「ととけっこう　よがあけた」のわらべ歌が絵本になっています。絵本を介して大人と子どもの関わりが生まれる、そんな１冊です。『いろいろおせわになりました』も「お茶を飲みにきてください」の歌の繰り返しです。この絵本は絵もおもしろいのですが、体を揺らしたり笑ったり、歌いながらやりとりをたのしんだりするなど、遊び心のある絵本です。

次は、「子どもの身近なもの」が描かれている絵本です。『くだもの』『りんご』はその一例です。読み聞かせをしていると、描かれたものを指さしたり、思わず前に出て食べるまねをしたりする子どもがいます。『メルロ=ポンティと＜子どもと絵本＞の現象学』（正置友子著）には『りんご』について、（絵本の）りんごの絵に向かってお辞儀をした子どもの事例や、ピンクのりんごに向かって自分の名前を叫んだ子どもの事例が書かれています。いろんな「モノの絵本」がある中で、描かれている「モノ」に存在感があるというか、子どもが思わず触れたくなるように描かれているか、より「本物」が描かれているかどうかが、選書において大切だと考えます。

１歳後半から２歳くらいの子どもには『おつきさま　こんばんは』『おばけが　ぞろぞろ』など、子どもの日常にあるもの・興味があるものからあそびにつながる、ストーリーのあるものもよいと思います。

選書の視点として①オノマトペ・リズム②子どもの身近なもの③物語性のあるものを紹介しましたが、保育者が絵本を取り入れる願いをどこにおくかによっても変わると思います。大人と１対１で読むことが多い０、１歳児には、たっぷりと言葉をかけることを大切にしたいです。保育者との関係性を土台に、身近なもの・身近なものが出てくる物語をたのしみ、友だちとともに読むことも通して、次第に周りの世界への興味関心が広がっていきます。

Ｑ２　２歳児クラス（混合保育）での絵本の選び方と読み聞かせ方について

０、１歳児は１対１で読む体験がだいじだと思います。２歳児後半になると友だちとたのしむ姿もありますが、“全員でいっしょに”をたのしむのは難しいかもしれません。それを踏まえたうえで『もこもこもこ』『いないいないばあ』を紹介します。小さい子向けといわれるこの絵本を、３歳になっても繰り返し読んで欲しい子はいます。小さな子ども向けと大人が言っても、子どもは全く違うたのしみ方をすることがあるのですね。『ノンタン』シリーズも「躾みたいで好きではない」という声が聞かれたようですが、１歳の子どもは全く違う視点でたのしんでいました。子どもに教わりながら、たのしめる年齢を探っていけたらと思います。ですから、２歳児向けといわれる絵本も、言葉のリズムがここちよければ０歳児でもそのリズムをたのしめるでしょうし、０歳児向けといわれる絵本も２歳の子どもが好きで長くたのしむこともできます。一概に「〇歳児向け」のものがいいということはないと思います。

Ｑ３　何度も読み、飽きてしまったときの対応について

「これ知ってる！」という言葉の意味をまず捉えます。子どもはそう言いながら、実際に読み始めるととてもよく聞いていることがあります。「知っている」ことを伝えたいのか、本当に飽きて（満足して）別の絵本がいいと思っているのかを捉えるのが大切だと思います。もしその絵本に飽きている（満足している）ように感じられるのであれば、新しい絵本を読むのもよいでしょう。５歳児くらいになれば、少し長めのお話もたのしめるようになります。

（２）読み聞かせの仕方について

Ｑ１　読み聞かせのポイント

子どもの反応を見、キャッチし、楽しく読みます。

Ｑ２　読み手の感情を入れずに読んだ方がいいのか？

子どもがお話や絵本の世界を十分にたのしめるかどうか、という視点が大事です。例えばものすごく声色を変えて読んだ場合、聞き手がどっと笑うことがあります。その笑いにより、お話の内容が聞き手に伝わらないということも起こります。子どもがお話をイメージできることが大切ですから、極端に抑揚をつけすぎないということもあると思います。

Ｑ３　絵本を読んでいる時、子どもの声にどう対応するか？

「知ってる！」「次はこうなるんだよ」などの声に対しては、目や頷きで応えるようにしています。「あなたの話したいきもちや伝えたいことは、しっかり聞いているよ」ということを子どもに伝えながらも、中断せずに読み続けます。

Ｑ４　絵本をさわりたがる子どもがいて、読み聞かせが中断してしまう場合、どうしたらよいか？

さわり（食べに来）たがるというのは、１、２歳児でよく経験しました。イメージで食べるという、そこのやりとりにたっぷり時間をかけ、たのしみたいと思います。最後まで聞けることを願うのはもう少し後になってからでよいのではないでしょうか。

（３）絵本をくるむ保育全般の考え方について

Ｑ１　気に入った絵本への執着心が強い１歳児への対応について

今この子にとってこの絵本は、ないと眠れないくらい必要なよりどころなのだと思います。保育園が安心できる居場所になり、その子自身が大丈夫になったときに、自然にその絵本がなくても眠れるようになっていくのではないでしょうか。「わがまま」でなく、眠るためのよすがとして絵本があってよかった、という見方をします。「眠る」ことは「生きる」ことと密接ですから、そこを大事にしたいです。そして、他の子たちも「今この子はこの絵本がすごく大切で、これを持っていることが安心につながるんだ」と思えるような集団となればよいと思います。入園当初人形が手放せない子どもに対し、人形の持参を認めるかどうかの事例と同様かなと思います。

Ｑ２　０歳児クラスの絵本の置き場所について

子どもの手の届くところに置く場合と、届かない位置に絵本棚を置いたり、表紙が見えるケースに入れて子どもの目線に吊したりする、という２通りがあるようです。手に取り、みるという絵本との出会いがあり、興味関心が広がっていく可能性を重視する前者は、なめる・かじる・破るにつながることもあります。私が関わった園では、子どもが絵本を破りそうになった時、破ってもよい、代わりになる紙を渡しました。そこにたっぷり手をかけられる環境があれば、この課題は解決するかもしれません。

後者は、本を大切に扱ってほしいとの願いや読みたい絵本を自分で選択できるのはもう少し後の年齢から、と考えての配置です。子どもが絵本を手に取ってみるという、「いま、まさにこのとき、これを」という瞬間を逃すこともあります。しかし、子どもが絵本を指さした時、気づいて取る保育者の十分な手があれば、これも解決できるかもしれません。

いずれにせよ、これらの環境構成には保育者の願いがあるのですね。子どもが絵本に関心をもったとき、その子の気持ちを受け取り、一緒に読む保育者の存在があることがまず大切だと思いますが、私自身がこのことについて今後も考えたいと思います。

Ｑ３　絵本のお話をもとに劇あそびにどうつなげるか。

ポイントは、子どもが劇あそびを「やりたい」というきもちになっているかどうかだと思います。参考に『子どもが発見する「ごっこ・劇あそび・劇づくり」絵本からひろがる　あそびの世界／実践編』『絵本から広がる遊びの世界―読みあう絵本』『私と私たちの物語を生きる子ども』を紹介します。この３冊は、絵本をたのしむ子どもの姿がまずあり、そこからあそびに展開している事例が豊富です。

２　子ども自ら絵本の世界を生きる/表現する実践例

『エルマーのぼうけん』の読み聞かせから学級全体でのお話作りにつながり、劇あそびに発展した東京学芸大学附属幼稚園５歳児の実践を、映像と『私と私たちの物語を生きる子ども』から紹介します。

普段から製作コーナーで探検に必要なものを作り、出かける子どもたちの姿がありました。そこで、10 月から『エルマーのぼうけん』を１日に１話ずつ読むようにしました。保育者は事前にエルマーのリュックサックの中身の小道具をつくり、動物島の地図を壁面に張り、たのしみながら物語を読みました。「子どもたちが興味をもって物語の世界に入り込めるように環境構成を整えた」そうです。物語が進むうちに、子どもたちは『エルマーのぼうけん』を自分たちのあそびに照らし合わせるようになりました。エルマーをまねて、探検グッズを作る子ども、自らも探検に行こうという子どもが出てきました。保育者はトイレットペーパーの芯やプリンカップなどを置いておき、子どもたちが作りたいものを自由に作れるようにしておきました。そして、物語を読み終えた時、竜に乗って探検に行くことになり、子どもたちが背に乗れるような竜づくりに取り掛かりました。できあがった竜はダイナミックで、さらに探検ごっこがたのしくなりました。

子どもの中には『エルマーのぼうけん』に関心を示さず、電車ごっこを続ける男児もいました。保育者は、子どもの好きなあそびを「子ども会」での発表につなげようと考えていました。この時「エルマーのぼうけんをみんなでやってみよう」ではなく、電車ごっこをする男児や女児たちの別のあそびも位置づけたいと考えました。保育者は、子どもの好きなあそび一つ一つを登場人物にして紙芝居風に話を作りました。先ほどの男児は中央線の運転士として登場しました。『エルマーのぼうけん』を取り入れて冒険ごっこをする子どもと、電車であそぶ子どもをつなげた「保育者のお話」は、冒険にいく子どもたちが中央線に乗って移動するという「学級のお話」となり、劇ごっこへと変わっていきました。

電車に乗って行くことが大事なこととして子ど

もたちに位置づいたので、運転士役の男児も、クラスの中で自分が大事な役を担っているという実感を伴い活動をしたそうです。探検に行く子どもたちは、探検隊のマークも作り、外にあそびに出るようになったので、外でのあそびが更に充実していきました。好きなあそびに『エルマーのぼうけん』のお話が加わり、子どもたちは自分たちの物語として受けとめ、新たな物語を生み出しました。結果として、好きなあそびが充実していったのですね。

子どもの「いま」が充実する絵本体験の背景には、３つのポイントがあると考えます。１つめは、「なぜその絵本・物語を読むのか」ということです。ここで保育者は、日ごろ冒険ごっこをたのしむ子どもの姿を捉え、『エルマーのぼうけん』を読むことで、よりたのしんだりイメージを膨らませたりしてくれたら…という願いをもっています。２つめは、お話をたのしみにしている子どもの姿と自らもお話をたのしむ保育者の姿です。読み手の大人もたのしい、というその「たのしい」感じは子どもにも伝わります。みんながたのしい、というお話の体験が、あそびにつながっていったのだと思います。３つめは、劇で発表するために読むのではなく、子どもがたのしんでいるから劇に広がっていく、という流れです。子どものあそびから（それが広がるように）読む絵本を選ぶという流れと、絵本を通してあそびが充実し更に広がるという双方向の流れがありますね。子どものあそびが出発点になったり、絵本が出発点になったりと、両者がまざりあってあそびが広がり、ここでは劇に繋がっていきました。最後まで電車ごっこをたのしんだ男児に関しても、お話がそのまま再現されることより、子どもたちが作り出していくことを大切にしたのだといえます。いかに子どもたちがあそびを広げていくかという環境構成の工夫の一端もみることができました。

道具としての絵本に助けられながら保育がなされる側面もたくさんあると思います。ここでお伝えしたかったことは、道具としてではなく、絵本そのものを一緒にたのしめたり、絵本そのものからあそびが広がっていったりすると、子どもも大人もたのしいと思える、保育のたのしさを感じることができるのではないかということ、そしてそんな場面が保育のどこかほんの一場面にあったら、素敵なのではないか、ということです。

３　おわりに

本年『エルマーのぼうけん』の作者ガネットさんが来日し、「読者を想定していたのではなく、とても楽しかったから書いたのだ」とおっしゃっていました。そんな、お話がもつ力もあると思います。

最後に＋αで２歳児、４歳児の実践を紹介します。ある２歳児クラスでは『おおかみと七ひきのこやぎ』が好きで、おおかみとこやぎになってあそぶ子どもの姿がありました。子どもが新聞紙を丸めて石を作り、お腹に入れてあそんでいたので、保育者はこやぎの耳や手袋などを置いておきました。やがてお腹に詰めておおかみのまねをしている子どもや、白い服を着てこやぎになりきることをたのしむ子どもも出てきました。保育者はこの姿が２歳児の終わりの発表会につながらないかと考えました。これは、絵本体験と環境があそびにつながっていくという事例です。４歳児クラスでは、『めっきらもっきらどおんどん』を好きな子どもたちが、（登場人物をまねて）空飛ぶマントづくりやお宝交換、縄跳びをするのがたのしくなった時に、保育者が登場人物から手紙が届いたという仕掛けをし、お泊り保育での体験につなげていったという事例もあります。

いずれも、絵本の世界を受容し、あそびで表現する子どもの姿がまずあり、そこからあそびが広がるような環境構成等の工夫をする保育者の支えがあります。そうした保育者の支えがあってあそびが広がり、子どもはさらにその絵本が好きになっていくのでしょう。

第６回 焼津市保育者資質向上研修会
平成 30 年 12 月 21 日（金）
会場：焼津公民館　大集会室